

海事英語辞書の認知的語義記述

池上彰 *1

Cognitive Semantic Description of a Maritime English Dictionary

Akira IKEGAMI

Abstract

Shipping accounts for 99.8% of Japan's international imports and exports. In other words, it is at the heart of the Japanese economy. The language used on ocean-going vessels that ply these international shipping routes is maritime English, a specialized form of English. However, many of the maritime English dictionaries currently available only describe English words and their translations, and are not designed to provide a guarantee of quality in learning. The reason for this is that there is little competition in the production process, as no dictionary-making experts are involved, and there is a guarantee of a certain number of purchases by maritime educational institutions, etc., so updates are rare. On the other hand, the awareness that general English dictionaries, especially English-Japanese dictionaries for learners, are products is high, and there is a stance of responding to the convenience of users. One of these is the description of a Semantic Tree. The purpose of this is said to be to assist in understanding word meanings. In this paper, focusing on existing maritime English dictionaries and several English-Japanese dictionaries for study, an ideal form of maritime English dictionary is developed from a cognitive perspective, especially metaphors. Reforming the descriptions in maritime English dictionaries means contributing to the shipping industry.

Keywords: *maritime English, dictionary, cognitive perspective, sense, meaning, metaphors*

1 はじめに

本稿の目的は、海運業界の教育レベル向上に向けた教材作成(ここでは英語辞書)の在り方を見直し、意識改革を促すことである。

海上輸送は、日本の国際貿易において極めて重要な役割を担っている。国土交通省の資料によれば、日本の貿易の 99.6 %は海上輸送に依存している¹⁾。この国際航路を運航する外航船では、海事英語が共通言語として用いられている^{注1)}。本稿では、海事英語を「船舶の構造、設備、運用、海洋、気象、漁業、海運、造船などに関する広範囲な専門英語」と定義する。それは、航海英語と機関英語に分類され、い

ずれも出入港時に用いられる。日本人外航船員にとって、海事英語の習得は必須であり、国際航路の円滑な運航を支えるためにも、その重要性は高い。

筆者は 29 年間に及ぶ中学校、高等学校、そして高等専門学校で英語教師として勤務した経験を持つ。その中でも、広島商船高等専門学校では非常勤講師として 3 年 6 か月、弓削商船高等専門学校では、助教として 1 年間勤務し、現在は大島商船高等専門学校に同じく助教として教育・研究に従事している。商船高等専門学校(以下、商船高専)の商船学科では海事英語が科目として履修される。この商船高専における教育・研究活動の中で、大きなテーマとな

ったのが、学生の語彙力を高めていくことであった。その目的を実現化するために必要とされたのは、教材としての高品質な海事英語辞書であった。

次に、現存する海事英語辞書と一般の学習用英和辞典の語義記述の具体例を概観したうえで、学習の質を担保できる海事英語辞書の語義記述の在り方について考察する。その要素を担うのは、認知言語学^{注2)}である。これは、人間の認知プロセスを基盤とした言語研究の枠組みであり、人間が身体を基盤として、脳や精神により行う知的・感性的な営みのことを指す。本稿では、特に海事英語の語義記述におけるメタファー（隠喩）の役割に焦点を当て、辞書編纂への応用可能性を論じる。

2 現存の海事英語辞書

一般の学習用英和辞典の記述項目は、見出し語、発音、語義、品詞、語形変化、文型、語法、用例、可算・不可算名詞、成句・句動詞といったものが挙げられる。その他、使用者の教養や知識を付与する目的でコラムなどの設置が見込まれることが多い。その中でも、語義は辞書の中心的な要素であり、用例は使用者の理解と活用を促す重要な役割を果たす。特に語義はことばの意味を理解する上で根幹をなすものと判断できる。海技系の大学や商船高等専門学校（以下、商船高専）の教育課程において、海事英語は必修科目として履修されている。その学習過程で必要とされるのが、教科書や参考書、あるいは英語辞書である。実際に、海事英語辞書は存在する。しかしながら、その内容を考えてみると、見出し語に訳語や動詞句、あるいは名詞句などが記述された簡素な内容を示すもので、学習の質を十分に保証しているとは言い難い。また辞書の製作過程において辞書編纂の専門家や言語学・英語学を専門とする教育者の関与はほとんどなく、主に海技系の大学教員や海技専門家が担ってきた。さらに、海技系の教育・研究機関等による一定数の購入が確約されていることや、辞書の種類が少なく販売競争が発生しないことから、改訂や重版が長期間行われない状況が続いている。また、こういった辞書の多くは、海技系の学生の多くが受験する海技士国家試験への持ち込みが許可されており^{注3)}、大きさも持ち運びが容易な小型のものが多い。その試験の中で、英語の問題は、英文和訳で英語力をはかる主旨のものである。試験場では、辞書の活用が即時の対応力を支える役割を果たす。しかし、計画的な長期学習の中で英語に対する理解を深めていくことが可能であるかについては、懐疑的にならざるを得ない。海事英語辞書の記述の質を上げていくことは、国の経済発展に大きく寄与していけると考えられる。同時に、輸出入大国である日本にとって、世界経済に大きな影響を及ぼす可能性がある。次に、既存の海事英語辞書から二

つの例をサンプルとして取り上げる。

2.1 『英和船用機関用語辞典』（第3版）²⁾

現存する海事英語辞書で最新のものである。海事英単語 port の記述は次の通りである。

port **名**ポート、口、孔、窓、左舷、港 **形**左舷の **副**左舷に

この英語辞書の記述内容については、見出し語、品詞情報と語義のみとなっている。国家試験である程度長い英文を読解しなければならない状況下において迅速に英単語の意味を捉えるためには有効だと判断できる。しかし、その記述内容の簡素さから考えると、長期的な計画のもとに海事英語習得を目的とした使用者の利便性に應えるものとは程遠い。

2.2 『英和海洋航海用語辞典』（2訂増補版）³⁾

この海事英語辞書は、見出し語に加えて、名詞と動詞の訳語を示し、動詞句を中心に記述した形となっている。通常の英語辞書と構造の面で異なっている点は、品詞別ではなく、セミコロンで並列的に記述されていることだ。また、「左舷に向く (or ける)」といった記述は、少し丁寧さに欠ける。この記述を踏襲するのであれば、「左舷に向く (ける)」のほうが適切である。

port 左舷 (の) ; 「取舵」; 港 ; 門 ; 開港 ; 左舷に向く (or ける)

be in port 入港している / clear a port 出港する
close a port (戦時・事変の時) 入港を禁止する ; 港を閉鎖する

leave a port 出港する / make a port 入港する ; 港に到着する

open a port 開港する ; 閉鎖した港の入港を許可する

port the helm (舵柄を左転して) 面舵を取る「面舵」

run down a port 港の緯度まで子午線に沿って航し、後距等圏に沿って港に向かう

touch a port 寄港する

語義の展開が樹形図等で示されることがなく、詳しい語情報等^{注4)}も記述されることなく、海事英語の学習者へと提供されていることを考えると、これも海技士国家試験への持ち込みを主な目的に製作されていると判断せざるを得ない。

以上、現存する海事英語辞書から、語義記述2例を挙げてみたが、主な使用目的が学習の質の向上ではないことを踏まえると、学習の質の向上を目的としているとは言い難い。

3 学習用英和辞典の語義記述

英語辞書を使う目的は、人によって異なる。例えば、意味の確認、発音や用例の参照、綴りの確認などが挙げられる。辞書編纂に関して言えば、最近の風潮として、語情報収集や用例採集の段階において、コンピュータが使用されている。また、語義記述は樹形図を使ったものが多い。これは、語の多義性をひとまとまりで理解出来るよう配慮されたものだ。

意味の関連を基礎とした語義の配列は、1970年代後半から研究が進められた認知言語学が大きく影響する。その後、学習用英和辞典の多義語記述において、語義同士の関係を示す樹形図が2000年代に入ってから頻出するようになった。

本来、辞書学における多義語とは、「互いに関連する複数の意味を持つ語」と解釈される。しかし、認知言語学の視点では、中心義（基本語義）を筆頭に、比喩的に意味が派生し、周辺義（比喩義）へと拡張されるといった考え方をする。その中でもメタファー（隠喩）は、見立てと呼ばれ、ある抽象概念を類似する別のものに喩える比喩である。海事英単語の中にも、日常生活の中で使われるメタファーは存在する。Lakoff and Johnson (1980) はその日常生活の中に頻出するメタファーの中で、「議論」を「戦争」に喩えて次のように表す。これは、概念メタファー⁵⁾の1例である。

ARGUMENT IS WAR
 Your claims are *indefensible*.
 He *attacked every weak point* in my argument.
 His criticisms were *right on target*.
 I *demolished* his argument.
 I've never won an argument with him.
 You disagree? Okay, *shoot!*
 If you use strategy, he'll *wipe you out*.
 He *shot down* all of my arguments.

Lakoff and Johnson (1980: 4) ⁴⁾

斜字体の部分が、「戦争」と関係する語句となっているが、無論、「議論」そのものは「戦争」ではなく、「争い」というある共通点を両者のあいだに挟んで、「見立て」を表現する。

語義記述の樹形図は、それが全ての辞書において同じものであるということではなく、辞書の編集方針や製作者の思いが反映される内容となる。ここで、いくつかの例を挙げながら、その語義の展開について検証したい。

3. 1 『ジーニアス英和辞典』(第6版) ⁵⁾

この英語辞書を取り上げる理由は、中心義の設定が「基本義」と明確に示されており、認知的な関連として、前置詞の重要語 *about* の語義樹形図が展開している様子が伺えるためである。

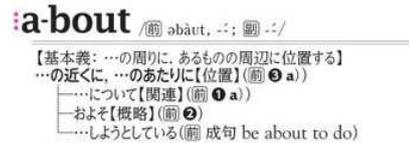


図1 aboutの基本義を中心とした語義展開

語義の展開は、比喩的な拡張が一般的であるものの、それは辞書使用者の英語レベルの高さが要求される。一見すると、この樹形図は意味の関連がつかみやすいように感じられる。しかし、基本義とその他の語義がどのような意味で繋がりを持つのかについて捉えることは容易でない。加えて、樹形図そのものに番号が記述されていないことは、単に「流れ」を汲んだ記述であると感じられることもある。よって、語義の展開順序が不明瞭である。

3. 2 『オーレックス英和辞典』(第2版新装版)

「中心義」という概念を記述し、認知的な視点が表面化している。ここで、*have* の例を見る。

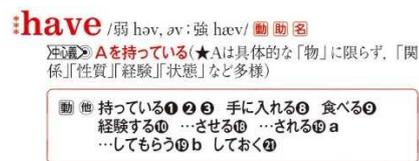


図2 haveの中心義とその他の語義

このように、中心義を設定し、「物」だけで無く、その他の抽象的な概念を「持つ」と記述している。これは多義語の展開を表す内容である。また、使用者が語の意味の理解するのを汲み取る意向が表れている。ここには、多義語の記述に樹形図は用いられていないものの、中心義の設定部分にあたる僅か2行ほどではあるが、比喩的な内容を思わせる記述が見える。また、特徴のあるコラムが、「メタファーの森」である。



図3 angerの「メタファーの森」

中心義に加えて、「メタファーの森」を記述するこ

とは、製作者側の認知的視点の高さをうかがい知れる。また、本辞書は学習上特に有益であると考えられるメタファーを 20 項目選定しそれらに基づいた表現を列挙・解説しており、使用者への配慮がされている。しかし、メタファーに関する記述が浮き彫りになったコラムは、それに興味を持つ人々、例えば言語研究者、英語教師に代表される専門職に携わる辞書使用者に限られてしまう可能性が生じる。ORED2 における「メタファーの森」はわずか 20 項目であり、選定基準が曖昧であるが故、その本来の目的を失いかねない。

3. 3 『ライトハウス英和辞典』(第7版)⁷⁾

樹形図で語義の展開の記述をした最新のものとなる。それが選定理由である。「意味のチャート」は、miss の原義(中心義)を記し、そこから展開していく様は、枝分かれで記されている。



図4 miss の「意味のチャート」

ここでの多義語の展開は一目で捉えることは可能であるが、単語の成り立ちが俯瞰できるか否かはまた別問題である。確かに、樹形図のメリットは語義の派生を視覚的に観測できるとはいえ、「俯瞰」については、少し改善の余地があり得る。また、それぞれの語義はどのような視点でグループ分けがされているのかについて懐疑的にならざるを得ない。そもそも、語義を俯瞰できるという行為は、英語レベルの高い辞書使用者に可能とされるものである。初心者向けの英語辞書ではないにせよ、この語義展開図には配慮の必要性を否認しない。

4. 多義語と意味展開図

前章では、語義の展開図が樹形図を中心とする英語辞書を数点取り上げ、その特徴について検証した。

まず、語義の記述に認知的な視点を取り入れることは、使用者が意味の繋がりを理解することに通じる。多義性について、Lakoff (1987: 416)⁸⁾ は、「語の意味は文字通りの意味(中心義)から文字通りではない意味(周辺義あるいは比喩義)へと広がる」としている。多義の出発点は、中心義であり、周辺義へと意味拡張され、比喩的なつながりを持つ。中心義と周辺義の関係を表すと次図のようになる。3 方向に伸びた矢印は、意味拡張を示す。

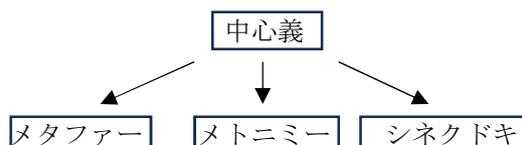


図5 中心義と周辺義の意味拡張展開図

周辺義は先述のメタファーをはじめ、メトニミー(換喩)、シネクドキ(提喩)と呼ばれる。メタファーのみならず、メトニミーやシネクドキも日常生活の場で多用される。シネクドキは久しく、メトニミーの一部であるとされてきたが、峻別されて現在に至る。

5. コーパスによる英語辞書の用例検証

近年、英語辞書製作段階で、用例はコーパス^{注6)}による実例を記述する傾向が主流となっている。コーパスとは、書きことばや話しことばなどの現実に使われたことばを、基準を設けたうえで、網羅的・代表的に収集したものをコンピュータ上で保存し、言語研究を目的とするものである。その規模は、コーパスサイズと呼ばれ、数万語から数億語のものまで存在する。

かつて、日本の英語辞書に記述される用例や語情報の多くは、辞書編纂者の知識や内省に依拠しており、事例に偏りが見られる傾向があった。その後コーパスが導入されたものの、部分的な利用に留まり、十分に活用されているとは言い難かった。しかし、コーパスを活かすことは、用例や語情報の代表性や網羅性を高める上で重要な役割を果たす。

昨今では、多くの辞書がその製作用に独自のコーパスを使用することが多く、辞書製作者の思いや信念がそのコーパス構築の段階で盛り込まれていく。このように、コーパスのメリットはある程度把握できるが、その反対にデメリットも存在する。コーパスはできるかぎり大きく、そして不断に拡大すべきであるとの考えが強い。しかし、多くの言語情報を持ったとしても、コンピュータに反映されない言語情報も存在する可能性がある。加えて、辞書編纂時点における言語情報の「代表性・網羅性」を含むことになる。ことばは日々変化するものであり、その移ろいが逐次的に網羅されるのならば問題はない。しかし、用例や語情報の裏付けは何かと問われる際に、「コーパスを使用した」という以外は極めて信憑性を持たないのが現実である。コンピュータを使用して、用例や語情報を採集することは、あくまでも手段として為されるものであり、言語情報は、持続的に調査を続けることが望まれる。

ここで、試験的に、コーパスを使って、海事英単語 port を例に取り、無作為検索してみたい。その目的

は、中心義を筆頭に、メタファーとして使われる用例の頻度を確認することである。

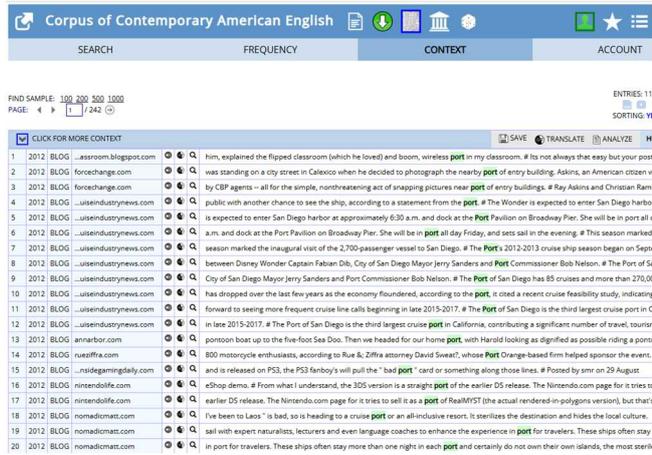


図6 COCAより port の検索上位20例⁹⁾

中心義を示す port の例を中心に、ゲームソフトメーカー任天堂が関与しているウェブサイト nintendolife.com にはメタファー表現が散見する。続いて、これも海事英単語の一つである、anchor をコーパスで探してみたい。これも無作為検索としたい。

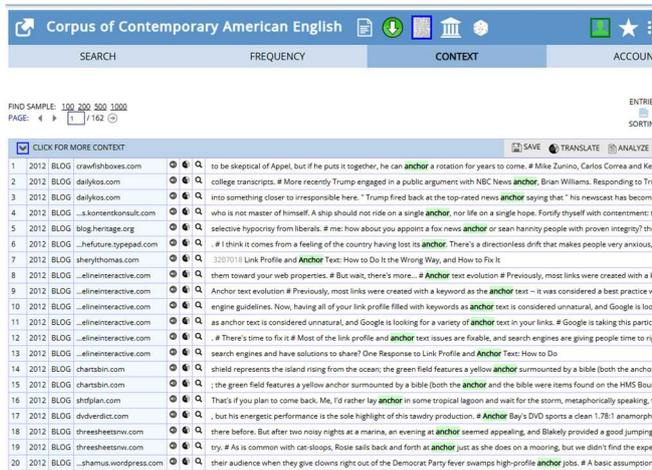


図7 COCAより anchor の検索上位20例¹⁰⁾

前述の port は異なる結果が伺える。anchor は元々「錨」を意味するが、ニュースの「アンカー」やアンカーテキストなどがこの20例の大半を占めていることから、汎用コーパスにおいては、メタファーの用例の数が中心義のそれを上回ることが明らかになる。

ここでは、port と anchor のみを例として挙げたが、他の例にもメタファーは多く存在することが予想さ

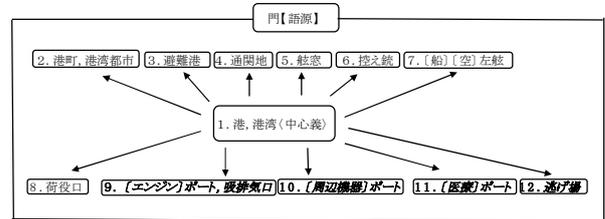
れる。一見海事英語であれども、ことばとして、我々の日常生活の中で、大きな役割を果たすことは否定できない。そのメタファーは、ことばのやり取りの中で、偶然・必然を問わず飛び交うことが考えられる。

こういった、メタファー表現に注目して英語辞書を編纂すると、外航船員への利便性だけでなく、それ以外の辞書使用者に何らかのインパクトを与えることも期待される。

6 筆者が理想とする海事英語辞書の製作

まず、実際には、一般の学習用英和辞典に見られる、見出し語、発音記号、語源、類語、派生語を記述する。中心義を筆頭に各語義を用例、日本語訳とともに記す。用例は、実際に使われた英語を反映させる目的でコーパスを参照し、リライトした平易な英文を記述する。また、重要であると判断した成句については語義とともに記す。語義展開図は、海事英語とメタファーが関連する記述を行う。ただし、樹形図などにありがちな線状的なものではない。具体的には、「語義マップ」で語源と語義全体を俯瞰が可能な記述を行う。「海の英語知識」はこれを一読することで語の周辺知識を高めていけるよう配慮する。これまで述べてきた内容を基に、一つの実例の海事英語辞書の語義記述サンプルを以下に示す。

《語義マップ》port の語義を眺めてみよう。



【海の英語知識】
中心義「港」が、日常生活で使用するコンピュータや医療機器、さらに自動車や船などのエンジンに関連するものにまで及ぶ。また、any port in a storm (嵐の中の寄港地＝窮余の策)は、「嵐の時はどんな港でもよい」という意味で比喩でもある。「左舷」については、元々、イギリスで「larboard」とされていたが、starboard(右舷)と発音が似ているため、海難事故が頻発したとされる。結局、通常船が港に接岸する際船体の左側を接岸していたことから、この語義が生まれた。また、port は他の様々な「運び」が絡む語句 airport, porter, transportなどを産み出している。

図8 port の語義記述と「海の英語知識」

この図では、語源の「門」が port の始点であることを示すため、全体を包括するよう位置づけた。中心義を語義展開図の真中に据え、そこから各語義が派生する様を表現される。語義9から12まではメタファー表現に該当し、斜字体で配列後半に纏めて記述する。海事語義と意味的な関係を保ちながらも、陸上等で使用される語義として表現することを意図するもので、メタファーが精神基盤であることと深く関わる。使用者にはその「こころの営み」を働き掛ける目的としている。メタファーはある抽象概念を別のものに見立てるため、想像力を要する。それ

は、メタファー写像 (metaphorical mapping) が大きく関係する。Lakoff (1987: 276-278)によると、メタファーは起点領域から目標領域への写像 (mapping) であるとする。図 8 で、port の中心義は、「港」であるが、これはコンピュータなどの USB 接続口に見立てられており、それが陸上の社会生活の中で必然のごとく使用されている。「港」と「USB 接続口」には意味的な共通点が存在する。「港」は船が人や物を乗せて出入りする場所であり、「USB 接続口」は USB フラッシュドライブが情報を出入りさせる場所となる。両 port の意味的な共通点は、「出入りさせる場所」である。筆者が理想とする海事英語辞書において、語義の展開にはメタファーが不可欠である。これは、メタファーが海事英語の意味を一般的な語義へと拡張し、理解を深める役割を果たすためである。本稿では、海事英単語 port を例として取り上げたが、陸上でも使用される海事関連の英単語は数多く存在する。そのため、メタファーは海事英語と一般英語の境界を曖昧にする可能性がある。

7 おわりに

メタファーはかつて、文学表現の中の美辞麗句とみなされてきた。しかし、海事英語の学習支援や辞書編纂の観点からも、その有用性が再評価されつつある。本研究では、学習の質の向上や海事英語の習得支援において、メタファーが辞書製作に果たす役割を検討する。今後の研究の進展が期待されるが、さらなる検討も必要である。辞書編纂においては、使用者の利便性を最優先に考慮し、継続的なフィードバックを取り入れることが求められる。辞書の価値は、最終的に使用者の評価によって決まるため、市場において競争が生じる。筆者が製作を試みる海事英語辞書は、日常生活で海事英単語に触れる機会を提供し、長期的な学習計画の支援を目的とする。また、使用者の評価を基に、さらなる改善と研究の発展を図る。

参考文献

- 1) 国土交通省「外航海運の現状と外航海運政策 1-2-1」スライド5枚目
(<https://www.mlit.go.jp/common/001353024.pdf>) (参照 2024-12-17)
- 2) 商船高専機関英語研究会『英和船用機関用語辞典』(海文堂出版, 2022年) 194頁。
- 3) 四之宮 博『英和 海洋航海用語辞典』(2訂増補版)(成山堂書店, 2022年) 219頁。
- 4) Lakoff, G. and Johnson, M. (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.4.
- 5) ジーニアス英和辞典 第6版 試し読み
(https://taishukan.meclib.jp/genius6_trial/book/#target/page_no=7) (参照 2024-12-6)
- 6) 旺文社の英語辞典 LEX シリーズ
(https://olex.obunsha.co.jp/?page_id=1960) (参照 2024-12-18)
- 7) 研究社 ライトハウス英和辞典 第7版
(https://dl.kenkyusha.co.jp/info/mihon_hoka/LH7-pamph-p2-3.jpg) (参照 2024-12-17)
- 8) Lakoff, G. (1987) *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago: The University of Chicago Press. 276-278, 416.
- 9) COCA 無作為検索の port
(<https://www.english-corpora.org/coca/>) (参照 2024-12-17)
- 10) COCA 無作為検索の anchor
(<https://www.english-corpora.org/coca/>) (参照 2024-12-17)

注記

- 注1) STCW (International Convention on Standards of Training, Certification and Watchkeeping for Seafarers) 条約で選定されている専門英語をさす。
- 注2) ラネカー (Ronald Langacker) の認知文法やレイコフ (George Lakoff) らによる比喩研究はその基礎を構築した代表的研究である。1970年代から80年代に萌芽をみた。
- 注3) 試験の内容については、英文(長文)を日本語訳する形式のものとなる。
(https://www.mlit.go.jp/maritime/maritime_tk1_000111.html) (参照 2025-2-17)
- 注4) 辞書の規模や編集方針により、その情報量は異なるが、概して、見出し語、発音、語義・語法、用例、品詞と語形変化、文型、熟語(成句・句動詞)派生語・語源・略語といった項目に加えて、語の周辺知識などを記述するコラムが数多く見られる。
- 注5) 人間の心理能力の一つとされ、ある概念領域を別の概念領域を通して理解するという認知の仕組みを示す。
- 注6) 汎用コーパスの代表的なものとして、Brown Corpus, COCA (Corpus of Contemporary American English) やBNC (the British National Corpus) などが挙げられる。